

# 孫に語る歴史

## 第8章 近代前期

谷川 修



## 第8章 近代前期

### 8.1 産業の発展と市民社会の成立

#### A. 産業革命・市民の政府・人権

##### 産業革命

1700年代、イギリスの人口は1000万人を超えた。でも当時、フランスやドイツにくらべれば人口は半分に足りない。たぶん日本の人口の1/3あまりしかなかった。その島国で目を見張ることが始まった。子供たちの乗りがる力持ちの大きな機械、蒸気機関車は、まずイギリスで走ったのだ。最初の蒸気機関は、1710年、石炭を掘るときに出る水を排水するために発明された。それまで人間は、動力を得るのに人力・牛馬の力・水や風の力しか知らなかったから、燃料を燃やした熱で動力を得るといふ発明は画期的なものだった。

機械といえば、はたおり機が古来その代表である。機という漢字はその「はた」を意味する。1730年代、はたおり機の横糸を通す「杼(ひ)」をひもで往復させる飛び杼が発明されて、自動化への道が開けた。1760年代に、効率的に糸を紡ぐ(つむぐ)機械が考案される。初め馬や水力で動かしたのを、J. ワットがピストンの往復運動を回転運動に変える改良をして、蒸気機関を使えるようにした。そして1780年代、蒸気機関で動かせる機械式の織機が完成した。有名なワットしか名をあげなかったけれど、自

動機械式の織機がつくられるまでに、たくさんの発明家が貢献したのだ。もっとも彼らは、職人の仕事を奪ったので恨まれ、打ちこわしを受けたりした。その頃すでに発明の利益を特許で守る法律ができていたのだよ。

今の話はみなイギリスで起きたことだ。技術の革新が、産業革命と呼ばれるものを引き起こした。イギリスは、オランダを追って毛織物産業を発展させて以来、農村は変化していた。農業法の改善が生産性を高めると、さらに土地を囲いこんで大規模な経営に進んだ。土地を失った農民が発生する。一方、インドから綿織物を輸入していたのを禁止された1700年代、アメリカから綿を輸入するようになっていた。機械式の織機は綿織物工業を発展させる。すると、さまざまな機械の生産を活気づけ、鉄の需要をひき起こす。森林を失っていたイギリスの製鉄業は石炭を使うから、石炭の生産を刺激する。生産物を運ぶために運河などが建設される…。つまり、多くの産業が、刺激しあって大きく発展する。工業全体を代表する鉄の生産量のグラフがそれを教える。1770年代に助走を始め、1780年を境に急激に増加した。

社会の構造も変化する。産業で成功した産業資本家が有産者階級に加わってますます大きな勢力になる。工場が集まる多くの都市ができ、土地を失った農民は都市に出て産業労働者などになる。農村人口はまだ多いけれども、農業を中心とする経済が、産業資本主義的な経済に変わっていった。産業革命という呼び名は、経済にとど

まらず社会構造にまで広がる大きな変化を指している。それは政治にも及び、有産者階級が主導するイギリスは、150 年近く世界の覇者となる。産業で勝るイギリスは、自分の利益になるから自由貿易を提唱する。

## アメリカ独立革命

北米大西洋岸のイギリス領は、本国へ綿や穀物を供給し、逆に機械類や綿織物などを輸入して、本国を追うように経済が進展した。自立する多数の農民がいて、商業や手工業も発展した。各州に広く住民の参加する議会があった。それに対し、フランス領を編入した本国政府は、北アメリカ植民地を強く統治しようとする。そこに対立が芽生え、ついに 1775 年、本国の正規軍と植民地の民兵のあいだの戦いになった。まだ多数が独立を求めているのではない。しかし、1776 年、本国生まれの T. ペインが『コモン・センス(常識)』という自立を勧める冊子を出版したら、一挙に人々の心を動かした。諸州の集まる会議が独立宣言を採択する。文案作成に参加した B. フランクリンは、たこあげをして雷が電気だということを確かめた人だ。『フランクリン自伝』は、当時のアメリカのようすと自立した人間の生き方を教えてくれる。イギリスから遠い戦争は、フランスの援助もあり、植民地側が有利になる。1783 年のパリ条約で独立が承認された。

最初に独立したのは 13 の州(state、国)で、独自の法律をもつ。アメリカの星条旗に 13 本の横じまで表現されている。けれども、必要が統一国家をもたらず。連邦国家

の憲法が制定され、独立戦争を指揮したJ. ワシントンが、1789 年、初代の大統領になった。日本で普通アメリカ合衆国と書くけれど、United States of America を表現するにはアメリカ合州国とした方がよいだろう。合州国憲法は、明確に文章に書かれた世界で初めての憲法である。君主のいない共和国ができた。政治権力の危険を知っている近代的な市民たちは、民主的で分権的な制度を採用した。二つの議会の議員は、まだ投票権に制限があるけれども、広く市民の選挙によって選ばれる。立法・行政・司法の三権力は分立している。各州は自立性が強く地方分権的だ。もともと身分制のない自由な社会であった。イギリスよりももっと普遍性をもつ権利の章典をつくり、近代的な人権を認めている。

独立した頃、人口は 400 万近くだったらしい。その後も、多くのヨーロッパ人が移民して、人口は急増する。それは、経済を膨張させ、強力な国を生み出す。

## フランス革命

1700 年代末、フランスには封建制と身分制が残っていた。領民は、領主の権限に従い、年貢を納めなければならない。三つの身分がある。国税を免除されるなどの特権をもつ聖職者と貴族、そして第 3 身分の平民である。上位の聖職者はたいてい貴族出身で、多くの領主が貴族身分だ。平民の中から、裕福な商工業者などの有産者階級(ブルジョアジー)が大きな勢力に育っていたが、大多数は小農民とさまざまな職業で暮らしている都市の民衆であ

る。つまり実際には、貴族層・ブルジョアジー・都市の民衆と農民の三つが、対立する階級であった。

ここでも、王国の財政は悪化し、改革の試みは成功しない。王の政府が見つけた解決策は、貴族に課税することだった。ところが貴族たちがそれに反対する。1789年、三つの身分の全国三部会を招集することになった。175年間開かれたことのなかった議会である。5月、三部会は、ベルサイユ宮殿で最初から波乱の船出をする。6月、第3身分の議員たちは、自分たちの集まりこそ国民議会だと唱える。いざこざの中、球戯場に集まった彼らは、憲法がつくられるまで解散しないと誓った。7月、全国三部会は、憲法制定国民議会になった。この事態に、旧体制を守ろうとする宮廷と貴族たちは軍隊を集め始める。

1789年7月14日、パリの民衆が蜂起してバスティーユ牢獄を占領した。すでに各地で騒動を起こしていた農民は、この頃には領主の館を襲うようになった。革命が始まったのだ。社会の進展と啓蒙思想が、人々の考え方を大きく変えていた。自由主義的な貴族たちが、状況に押されて、第3身分の議員たちに妥協する。8月、議会は「封建制を廃止する」と決議する。国民を統一した市民社会をめざすことになった議会は、さらに、人権と市民権についての宣言を採択した。思想・言論・信教の自由と権利の平等・国民主権・所有権など、近代社会の市民の権利が確認されたのである。今日、日本を含めた民主主義国家は、アメリカ合州国とフランスの提唱した人権をお手本として、憲法の条項に書きつけている。ルイ 16

世は議会の議決をすぐには認めない。10月、パリの民衆がベルサイユ宮殿に押しかけて、国王一家をパリに連れて行く。国王は議会の決定を承認するしかない。

国内が混乱する中、国外に亡命した貴族たちは革命政府を倒そうと動き、外国もそれを援助する。ルイ16世の王妃マリー・アントワネットは、オーストリア女王の末娘であった。1791年、彼女は王と子供たちと、兄のオーストリアへ脱出を図るが、不運にも国境近くで見つかってしまう。1792年、オーストリアなど外国と戦争になった。状況はいっそう緊張する。全国からパリに集まった義勇兵と民衆は、王宮を襲撃して国王一家を捕えてしまう。ついに王政が廃止された。

国内・国外の反対勢力に対抗するために、議会の中心勢力は、広く大衆の力を借りることにし、普通選挙によって国民公会と呼ぶ議会をつくる。フランスは共和制になった。領主権を代償なしに廃止し、国内が騒然とする中で、人間たちは平和な時なら度を超していると思う行動に走る。国王が断頭台で処刑され、王妃も同じ運命をたどった。急進派は血なまぐさい恐怖政治によって政権を維持する。この状況に、中心勢力のブルジョアジーは、民衆や農民の要求が行き過ぎるのを恐れて、1794年、クー・デターによって急進派を倒した。恐怖政治を実行した者たちは、彼らが敵対者にしたように断頭台に果てた。国民公会から左翼議員は追放される。有産者階級の主導する政権に変わって、革命は転機を迎える。



人間たちの動きが社会の構造を変えて行き、いつか政治の体制も変化する時が来る。フランス革命は、自由と平等と友愛をかかげて、市民の政府をつくり、犯してはならない基本的人権を宣言した。その普遍的な理念は、国境を越えて人々に共感をもって迎えられる。だから、ベートーヴェンには、革命軍をひきいて勝利する指揮官が英雄に見えたのだ。革命がもたらした民主主義をくらべてみると、イギリスでは有産者階級が代表する市民の自由が尊重され、フランスでは1789年の革命に民衆が参加したことから平等が重要だ。だが、社会がもたらした民主的だったアメリカ合州国におよばない。いずれにせよ、近代民主主義はヨーロッパ諸国に広がっていく。

## B. 西洋の近代化

### 過渡期：ナポレオンの戦争とウィーン会議

しかし歴史は、紆余曲折し試行錯誤する。1795年に選挙権を制限する選挙にもどしてできた政権は、安定したものではない。フランスは、1792年以来、オーストリアを先頭とするヨーロッパの諸王国と戦争状態にある。

時計の針を少しもどそう。地中海の港トゥーロンは、イギリス海軍に援護された反革命派が占領していた。そのトゥーロンを奪い返すという大手柄を、若い砲兵隊長がたてる。昇進して司令官になった軍略家は、オーストリアをめざしアルプスを越えると、イタリア北部を占領して、政治的な力量も示した。ナポレオン・ボナパルトは

フランスの英雄になった。そして、イギリスのインドとの交通を妨害するためにエジプトへ遠征した。このとき有名なロゼッタ・ストーンが発見された。のちに、J.F. シャンポリオンという人が石碑に刻まれた古代エジプト語を解読し、エジプトの古代史が明らかになる。1799 年、フランスがまたヨーロッパ諸国に包囲されている状況を知ったボナパルトは、自分の出番だと考えて帰国する。エジプトに残されたフランス軍本隊とロゼッタ石は、やがて両方ともイギリス軍の手に落ちる。大英博物館に展示されているロゼッタ石は、こうした歴史も語っているのだ。さて、政治の行きづまりを何とかしたい権力者が、帰国した英雄を利用しようと画策した。すると、英雄はその上を行き、軍隊で議会を包囲して権力をかすめとる。軍事クー・デターは英雄を独裁者にした。

ボナパルトは、国内政治では革命の成果を法典にし、諸制度を整えていく。だが、国外に対しては侵略的で、再度のイタリア遠征で英雄ぶりを見せる。1804 年、彼はナポレオン皇帝になった。それを聞いたベートーヴェンが、交響曲第 3 番をボナパルトに捧げることをやめる。市民の政府ができたフランスでは、外敵から国を守る戦争になると近代の意味の「国民」意識が生まれ、国民軍がつくられていた。近代的な徴兵制度のはじまりである。ナポレオンの強さは、軍隊が徴兵によって補充されることに基づく。フランスの祖国防衛戦争は皇帝の征服戦争に変わって、ヨーロッパがしばらく揺さぶられる。

フランスの大敵は海峡の向こうのイギリスだ。まず海で戦うことになったが、トラファルガーの海戦で負けてしまう。陸で攻勢に出るしかない。ナポレオンは、陸では連戦連勝してヨーロッパ大陸の覇者となる。彼の兄弟が占領地につくられた王国の王になった。スペインが征服されたとき、画家 F. ゴヤがその光景を絵にしている。画家も近代という時代の中にいる。イギリスをおさえこむために、ナポレオンは、大陸を封鎖してイギリスとの交易を禁止する命令を出した。ところが、数年するとロシアがそれから脱退したので、1812 年、ナポレオンはロシア遠征へ向かう。だが軍略家も、ロシアの広大な領土の奥深さに勝てなかった。まもなく、プロイセンを先頭とするドイツの反抗が起きる。1814 年、とうとう対仏同盟軍がパリに入城し、ナポレオンは退位させられた。翌年のワーテルローの戦いは最後のあがきだった。

ナポレオンのフランスに勝ったヨーロッパ諸国は、ウィーンで、戦争のあと始末をつける会議を開いた。功績の大きかったイギリス・オーストリア・ロシア・プロイセンは領土を獲得した。ロシアがポーランド大公国を支配下に入れ、イギリスがオランダの植民地だったアフリカ南端とスリランカをとったことなどが注目される。オランダとベルギーはナポレオンの弟を王とする王国になっていたのを、以前の首長の家がもらう。スイスは永世中立国になった…。ウィーン会議は、諸国の王政を守り、革命が提唱した民主主義をおさえこむ体制をもたらす。

## 近代への歩み

フランス革命とナポレオンの時代、イギリスで産業革命が發展を続けていた。今日の世界を見て分かることは、先進国が技術を独り占めにしようとしても、経済の動きそのものによって、技術は他の国々にも広まるとのことだ。産業革命は、フランス・ドイツをはじめとするヨーロッパ大陸に波及する。また、市民社会へ向かう潮流を、ウィーン体制はとめることができない。近代に踏み出したヨーロッパ諸国は、ナポレオン戦争が終わってみると、近代化の競争の場に立っていることを知る。

イギリスは先頭を走っている。1800年代に入ると、そこに蒸気機関車が走りだし、鉄道網がはりめぐらされる。鉄道は、1850年頃までに、パリ・ベルリン・ウィーン、ベルギー・オランダなどに伸びていく。物資を大量に運べるようになる。物だけでなく人が活発に動き、情報が短時間に広い範囲に伝わる。都市にはすでにガス灯がある。V. ユーゴーの小説『レ・ミゼラブル』の主人公ジャン・ヴァルジャンは、パリの下水道を逃げるね。人々の生活のしかたは急速に変化しつつあった。

近代化の典型例を、先頭走者のイギリスで見てみよう。1800年アイルランドを併合して、グレートブリテン・アイルランド連合王国になっている。奴隷貿易が廃止され、のちには奴隷制を禁止した。イギリス国教会に従う慣例が改められ、カトリックを公認するようになる。産業化された社会の出会うできごとが続く。新興の産業資本家

層が、地主層などそれまで得ていた利益を守ろうとする勢力を圧倒していく。東インド会社の貿易独占権が廃止される。選挙権が中産階級にまで拡大され、穀物生産者を守る保護貿易から自由貿易に移る。社会には、自分の労働を売って生活する労働者がうんと増える。資本主義が社会のあり方を変えつつあるのだ。労働者たちは、選挙権を成年男子全員に拡大せよと要求するチャーティスト運動に参加した。

初期の産業労働者の状態は、小さな子供や女性がそれまでの社会になかった働き方で働き、社会問題になった。労働者の過酷な状態を改善しようとする活動家が現われる。R. オーウエンはイギリスでのその代表者である。自分の工場で改善の努力をし、すでに生まれていた労働組合をつないで、全国的な組織をつくるのに力を尽くした。協同組合もつくっている。

イギリス議会制度も歴史を重ねていく。イギリス政治の支配層はまだ前代からの支配をひきつぐ地主階級が中心で、トーリー党とホイッグ党が政権をきそった。地主層などの支持を受けたトーリー党と、新興の資本家や中産階級たちの支持を得たホイッグ党は、1800年代中頃にかけて、保守党と自由党に再編される。議会政治で活躍した政治家のことを知るのには、政治を考えるのに大事なかもしれないけれど、教科書にまかせよう。議会は、反対派が不名誉だとしたアヘン戦争のための予算案を、わずかの差で可決している。イギリスの政治家は、イギリスの利益を追求するのだ。

フランスでも産業革命が進行して、産業社会化が進みつつあった。産業資本家の加わるブルジョアジーの力はいっそう強くなる。工場労働者はまだそれほど多くないが、さまざまな職業につく賃金労働者がいる。労働者の貧困が目立ってきて、フランス啓蒙思想の後継者であるサン・シモンやC. フーリエが、社会の改善のための方策を提唱した。ここに、社会主義という考え方が生まれた。また、パリには、財産の共有をめざし国家権力を奪うという共産主義の結社も生まれた。社会を改革しようとする思想がフランスを中心に育っていく。

さて、ブルボン朝が復活したフランスは、制限選挙による立憲君主制であった。政治的な対立がくすぶっているのに、再建された王政は復古的な政策をとり改革派と対立する。対立は深まり、1830年7月、ついにパリの民衆がバリケードを築いて、市街戦に勝利する。ところが、7月革命と呼ばれるこの事件後にできたのは、ブルボン朝の支族が王に立つ立憲君主制であった。そこでも、選挙権が上層ブルジョアジーに限られていて、不満をもつ者たちが多くいた。改革派は、選挙権の拡大をスローガンに改革をうったえる。それは広く民衆・労働者の政治運動に発展して、1848年2月を迎える。パリの国民軍の士官たちは、選挙権のない階層の人々であった。そういう国民軍から改革運動の側につく部隊が出る。集会が禁止されると、民衆が街頭にあふれ出て革命的な状況になった。政府はおさえきれなくなり、国王が国外へ脱出して、政権は共和派のものになった。これを2月革命という。

1848年、フランスでの革命のニュースは、ヨーロッパ中を革命に引きこむ。どの国でも、進行速度はちがうけれど、産業革命が進み、民主化も進行中であった。選挙権のあるところではさらなる民主化を求め、遅れた国ではまだ残っている封建的な特権を廃止することを求め、大きな帝国に服属しているところでは民族の自立を求めた。そして、産業化によって生じてきた社会問題が重要な課題になった。労働者が自分たちの権利を要求し、社会主義的な運動がもりあがる。K. マルクスと F. エンゲルスが、その時までには共産主義の考えに進み、労働者の運動を理論的に主導する。この年に、有名な「万国の労働者団結せよ」と呼びかける『共産党宣言』をロンドンで出版している。

革命の中心地パリでは、労働者の権利について要求が出るようになっていた。6月、政府の抑圧に対して、労働者・民衆がまたバリケードを築くと、政府は軍隊を動員してそれを鎮圧した。死者が数千人、逮捕者は一万人を超えた。逮捕された人々は、以前に征服した地中海対岸のアルジェリアに送られた。結局、フランス人の言うブルジョアつまり有産者階級が政治を主導し、それ以下の人々と無産者階級はその支配にあまんじる体制ができあがった。

ヨーロッパのほかの国々の状況も似た体制に収束した。こうして、1848年はヨーロッパ近代の節目となって、諸国は、いっそうの近代化と富の獲得競争へ向かう。

## アメリカ諸国の独立

コロンブスが来てから 300 年も経つと、アメリカのそれぞれの地域には、先住民と外来の人間たちそして混血の人々が織りなす社会が出来上がっていた。合州国の独立と民主主義が、それらの地域を自立へと誘う。

カリブ海のある島に金鉱山を見つけると、スペイン人は、先住民を奴隷にして掘った。先住民の社会は数十年のうちに消え、人々は死に絶えた。代わりにアフリカから奴隷が買われる。1600 年代にフランスの海賊が島の西を占領した。そのハイチで、フランス人は、アフリカ人奴隷を使って綿や砂糖キビやコーヒーを栽培させた。住民は、フランス人農園主を除けば、アフリカ人とその混血の人々である。フランスの革命を聞いて、人々は蜂起して自立した。いったんナポレオンに負けたが、1804 年独立することができた。合州国につぐ共和国、それもアフリカ系の人々の国ハイチである。

アメリカ諸国の独立を押しとどめることはできない。スペイン領では、独立運動や独立戦争が必要だったけれど、1800 年代前半に、今あるほとんどの国々が独立した。人口の大半がスペイン人と先住民の混血である。南端のアルゼンチンやチリは例外で、スペイン人が大半だ。ポルトガル領だったブラジルは、ナポレオン軍の侵入でポルトガル王が逃げてくる事件があって、最初は王国の形で独立した。ポルトガル人が大半で、ここではアフリカ人奴隷を使ったことから、先住民・アフリカ人・混血の人々がいる。いずれにせよ、スペイン人・ポルトガル人



が支配層であるラテン・アメリカでは、社会の民主化に年月がかかる。産業の発展も遅れた。

話が長くなって、おじいさんは息切れしてきたよ。こ  
こらへんでちょっと一休みさせてくれたまえ(笑い)。

### C. 近代化された西洋諸国

1851年、文明化を祝う第1回万国博覧会がロンドンで開かれた。産業はますます発展している。鉄道網がヨーロッパ中に広がり、1863年にはロンドンに地下鉄が走った。まだ大半は帆船だけれども、自力で動く蒸気船が現われた。海上輸送が発展する。大砲や銃の性能も上がり、軍勢力は飛躍的に高まる。1869年スエズ運河が開通した。目まぐるしい産業の発展で、生活水準が上がっていっただろう。歴史上の人物たちは写真で登場するようになる。社会は歩みを速めて、諸国の政治が展開する。

フランスは、1848年に2番目の共和政になって、男子普通選挙が復活した。政情は必ずしも安定していない。そこに、ルイ・ナポレオン・ボナパルトという人物が登場する。父はナポレオンの弟で一時期オランダ王だった。社会主義的な考え方に染まりながら、野心家である。ナポレオンの名が彼を大統領選挙に当選させる。農民や大衆は、1852年の国民投票で、彼を皇帝ナポレオン3世にした。政府は、鉄道網を拡大するなど産業の基盤をつくる事業を進めた。都市が発展する。パリは大改造されて、

ヨーロッパ文化の中心都市という地位を得る。フランスの産業革命はこの帝政期に完成する。工業化の進行は産業資本家を満足させ、労働者に対応する政策も実施された。近代の政府は、さまざまな階層の支持を取りつけないといけないのだ。戦争をして勝利を求めた。大衆民主主義の最初の実験だった、とすることができる。しかし、大衆の人気を引きつける政策がいつまでも成功するとはかぎらない。世論が戦争へと突き進む。

ドイツは、文化面で大きな成果を上げたけれども、経済的に遅れをとっていた。ナポレオン戦争が終わったとき、まだ数十の領邦国家に分かれていた。その中でプロイセンが経済を改善させていく。ビスマルク首相が登場すると、富国強兵の政策を強力に進める。鉄と血とを象徴的な言葉として使ったので鉄血宰相と呼ばれている。プロイセンは、ほぼ産業革命を終える段階に進んだ。オーストリアを中心とするドイツ諸国との戦いに勝利して、主導的な地位につく。そして、ビスマルクはフランスを怒らせる行動に出た。電報を改変したそうだ。1870年、挑発にのったフランスの宣戦布告に対し、ドイツの諸国もプロイセン側について戦争になった。40日あまりでフランス軍を破り、ナポレオン3世を捕えた。フランスには3番目の共和国政府ができたけれど、パリは陥落する。1871年1月、プロイセン王は、敵国のベルサイユ宮殿でドイツ皇帝の冠をかむる。中世以来ばらばらだったドイツはやっと統一された。男子普通選挙をする立憲制である。ドイツ語を話すオーストリアは、別の国になった。

1871年3月、共和国政府が降伏して国境地域を失ったことに怒り、パリの国民軍と民衆が蜂起した。選挙によって、パリに労働者や自由業者が主導する共同体、パリ・コミューンができる。女性の参政権など革新的な政策をうち出し、社会主義者や共産主義者を興奮させるできごとだったけれど、2か月で政府に鎮圧された。

イタリアは、ローマ帝国がほろびて以来統一が失われ、諸外国から侵略の対象にされてさまざまな困難に会ってきた。南イタリアとシチリアの王位を、外国の王家の者たちが取りあった。ナポレオンの出たコルシカ島は、彼が生まれる前年にジェノバからフランスに売られたのだ。フランス革命や1848年の革命は、イタリアへも波及した。長続きしなかったが、人々の意識をイタリアの統一へと向かわせる。統一運動はG. マッツィーニの組織「青年イタリア」に発展し、そこから出たG. ガリバルディの赤シャツ隊が南イタリアを攻め落とし、北西イタリアのサルデーニャ王国のカブール首相が統一へ導いた。

1861年にできたイタリア王国は、それぞれの地方に独特の文化や慣習のあるイタリアを治めるのに、中央集権的な政府をつくる。しかし、イタリアのかかえる南北問題は現代まで続いている。北イタリアでオーストリアを押し出し、ローマ教皇領も併合して、1870年にイタリアはやっと統一された。首都は歴史を誇るローマに移された。教皇はローマ市内の一角に住むことになる。それでもそこは、バチカン市国という一つの国だよ。

ロシアは、ヨーロッパの辺境に位置し、近代化はゆっくり進む。ロシア皇帝の統治は、貴族たちによる土地の領有に基礎を置いている。そして農民は農奴と呼ばれるほど強く土地にしばりつけられていた。1800年代前半、ロシア帝国は、黒海とカスピ海にはさまれたコーカサス地方を征服する。そこでは、ロシアからいくつかの国が独立した今でも、紛争がくすぶっている。中央アジアへも南下していく。黒海では以前にオスマン帝国と戦ったが、1850年代にまた戦争を起こす。それは、イギリスとフランスが介入して、クリミア戦争と呼ばれる国際戦争になった。イギリス軍の看護隊をひきいた小夜鳴き鳥、いや、ナイティンゲールという名の看護婦を知っているね。結局、ロシアはイギリスとフランスに敗北する。

西ヨーロッパに遅れをとっていることを悟った皇帝は、1861年、農奴解放令を出す。解放された農奴は小作農になり、都市に出て行く者も現われる。ロシアは産業革命へと進む。近代化の遅れは改革をめざす思想を生んだけれど、政府がおさえつけて展望をふさいだ。テロに走る者が出て、無政府主義の考えに進む者もあった。

アメリカ合州国には言うまでもなく先住民がいた。広大な土地にくらべその人口が少なかったとはいえ、土地を奪っていくことはいつも衝突や戦闘をとまっていた。それでも合州国にすれば、耕地として利用されることの少ない土地が広がる西部は、未開の辺境であった。フロンティア精神という言葉は開拓者の気分を表現している。

自立して経営し、自由競争に勝って、成功する、というアメリカ人の考え方を育てた。人々が西部へ広がるのを、ヨーロッパからの移民が補充する。先住民との戦いが何度も起こっている。彼らを指定した区域に押しこめては西に進んだ。メキシコの土地を買ったり奪ったりして領土を増やした。合州国の地図を見ると、州境が直線だということに気づく。カナダとの西側の国境線も机の上で引いたのだ。1840年代末、サンフランシスコの近くで金が発見され、一山当てようとする人々が押しかけた。この頃フロンティアは太平洋に達したのである。そして、黒船が日本に来る。

しかし1861年、合州国は大きな試練に直面する。北部で諸産業がかなり発展し近代化が進んでいるのに対し、南部はアフリカ系奴隷を使う大農場主が中心勢力だった。利害が一致せず、南部諸州は別に国を建てた。対立はついに南北間の戦争になる。北部の合州国は奴隷解放宣言を出した。4年間の南北戦争で60万人以上が戦死した。おじいさんはロマンティックな映画「風と共に去りぬ」を観たとき分かっていなかったけれど、身近で何人もが戦死し、アメリカ人には忘れられない大戦争だったのだ。北軍はゲティスバーグで決戦に勝利する。追悼式での大統領A. リンカーンの演説に、「人民の、人民による、人民のための政治」という言葉がある。君たちも知っているだろう。戦争中に大陸横断鉄道の建設が始まっていた。1869年、五大湖を通して大西洋に行けて南のミシシッピ一川ともつながるシカゴと、サンフランシスコ湾をむす

ぶ鉄道が完成した。大西洋側から太平洋側に大量の物資を早く送れるようになった。もう陸のフロンティアはない。いよいよアメリカ合州国は、海外へ活動の場を求めることになった。1870 年男子普通選挙が採用された。

イギリスは先頭を走っていて、政治は安定している。さまざまな方面で改善を進める。小さな商店主や都市の労働者までに選挙権が拡大された。義務教育が始まる。経済の自由化が進み東インド会社は解散された。他方で、労働組合法もつくられた。労働者の保護を実行できるほど経済が発展したのだ。海外では、イギリスの下での自治領としてカナダが自立した。他方で、産業の発展が、それまでとは規模も形も違う海外進出をうながす。

西洋の国々は、歴史を引きずりながら独自の道をたどり、1870 年頃、それぞれ異なる特徴をもつ近代国家になった。そこからどのようなことが起こるだろうか。

#### *D. 近代前期の西洋文明*

##### **科学と技術の発展**

この時代、自然科学は目をみはるほど発展した。物理学はまっ先に体系的な学問になった。産業の発展と並行して熱力学が生まれ、今日最も重要なエネルギーという概念が発見された。新しい分野の電磁気学は、光が電磁波だと明らかにして光学と結びつく。さらに電信技術な

どの実用化を生む。化学で分子や原子の存在が明らかにされて、人間は、この世界がとても小さな構成要素からつくられたものだと知った。そこから物理現象を記述する統計力学もできる。物理学を基礎に置いた機械的な自然観で、世界をほぼ理解できるほどに見えた。

近代になって大学をはじめとする教育・研究機関が整備されて、自然科学は制度に支えられて進展していく。画期的な発見をした人たちの偉大さを忘れてはいけないけれど、科学は、ますます人間たちの協同の営みとして発展していく。生物学や医学も、少しあとから追いかけて発展した。細菌がどのように発生するか知られていなかったのが、自然発生説が実験的に否定されて、原初は別にして、生命は生命からしか発生しないことが明らかになった。人間におぼろげに分かっていた遺伝が、物質的な何かに埋めこまれて規則的なやり方で起きることも明らかになった。地質や化石の研究が、人間の歴史以前にさかのぼれるようにした。そこから、生物の種の多様化が環境の中での遺伝現象によって起こるだろう、という C.R. ダーウィンの進化論が生まれた。大いなる遺産を残してくれた自然科学者たちの名をあげたいのはやまやまだ。それに、自然科学が技術を生み出した歴史も語るのが本当なのだ。でも、話が長くなりすぎる。どうか、それぞれの科目で勉強してくれたまえ。

## 近代前期の文化

### I. カントの主著『純粋理性批判』・『実践理性批判』

などを、ここでは近代に入れる。理性を超えないで人間はどこまで到達できるかを考えた。世界市民という立場に立つ普遍的な思想だ。次に、カントに始まるドイツ観念論と呼ばれる議論を前進させ、G.W.F. ヘーゲルが体系的な哲学を築いた。著書に『精神現象学』などがある。弁証法という考え方を押し進め、歴史など社会的な問題まで哲学的に論じた。L.A. フォイエルバッハは唯物論に進んだ。キリスト教についての深い思索は、デンマーク人 S.A. キェルケゴールの実存主義を生み出す。イギリスでは、経済学の研究がさらに進み、哲学的には合理主義的な考察がなされた。たとえば、J.S. ミルの『自由論』は、自由という言葉の深い意味を教えてくれる。数々の政治劇を見て、フランスやロシアに無政府主義者が現われた。近代を見つめ、ドイツには世紀末思想も生まれる。ここに名をあげなかった多くの人が、哲学・思想の領域で近代的な考察を進めた。

社会主義的な運動が先進国で展開され、理論が議論された。マルクスは、エンゲルスと、フランスの社会主義・ドイツの唯物論・イギリスの経済学を合わせて、総合的な世界観を形づくろうとした。マルクス主義というのは、単なる共産主義の理論ではない。彼が最も力を尽くして書いたのは『資本論』だ。それ以後、マルクス主義の立場から、多くの人たちが政治や社会や経済を論じ、社会改革の運動に参加する。

ドイツ人が第一にあげる文学者は、J.W. ゲーテだろう。



伝説の人を材題に『ファウスト』を書いた。若い頃の小説『若きウェルテルの悩み』はベストセラーになった。近代文学の幕開けを告げる人だ。活躍の範囲は広い。ヨーロッパでは、文学者は詩人と呼ばれるのだよ。ゲーテなど過渡期の人の作品は、古典主義という部類に入れられている。次の19世紀は、小説の世紀でもあった。まずロマン主義という部類にくられる作品が現われた。写実主義と呼ばれる作品も現われる。フランスのすぐれた作家をあげてみよう。ペンネームがスタンダールの小説『パルムの僧院』は、構想も展開もすばらしいけれど、口述筆記して出来たそうだ。『谷間のゆり』などを書いたH. バルザックがいる。G. フローベールの『ボヴァリー夫人』は、近代人をはじめて描いた小説とされている。ロシアに、『罪と罰』を書いたF.M. ドストエフスキーが出た。人間性を深く見つめ、今でも読者を引きつける。

『戦争と平和』を書いたL.N. トルストイは自然主義の作家に入れられている。貴族だけど農奴解放の運動に共感した人道主義の人だ。イギリスにC. ディケンズなどがいる。合州国の先頭打者は、M. トウエインだ。『ハックルベリー・フィンの冒険』はおもしろいよ。H. メルビルの『白鯨』もある。

詩人たちを紹介する余白がなくなったよ。近代詩の幕を開けた人C. ボードレールや、P.M. ベルレーヌ、J.N.A. ランボーの名だけをあげておこう。日本の詩歌だけを読んでいては、詩の広がりを知ることはできない。

文学は長く輝きを放つ。ここでは省いた人たちを含め

て、しばしば名の上がる近代の作品を読んだら、きっと感動するだろう。

近代美術の潮流も文学と同じ呼び名で分類されている。E. ドラクローアのフランス7月革命を描いた絵をどこかで見たことがあるだろう。「民衆を導く自由の女神」というあれだ。ロマン主義とされている。ゴヤの名はもうあげた。近代絵画はフランスで花開いた。G. クールベが写実主義を始めた。J.F. ミレーの「晩鐘」や「落穂拾い」の写しはよく見かけるね。彼や J.B.C. コローの自然主義の絵なら、おじいさんのような初心者にも分かりやすい。E. マネは印象派へ移ろうとしている。今では、遠い西洋の美術作品を、図書館の画集などで見ることができる。ときおり展覧会もある。関心をもって美的センスを身につけよう。

L. ベートーヴェンは、それ以前の音楽を集大成して、西洋音楽の一つの頂点をきわめた。彼の音楽は心の底まで響いてくる。交響曲第九番の合唱隊を含めた大きな管弦楽団が、近代というものをよく示している。王侯の宮殿で少人数の楽団が演奏していた時代とは違う。劇場や音楽堂で演奏され、人数の増えた市民層が聴きに行くのだ。F. シューベルトなどのロマン派の音楽家が続く。F. F. ショパンの名を知っているね。バックグランド・ミュージックとして聞いているかもしれない。演奏会に行かなくても、再生装置で聞けるから、いろんなクラシック音楽に親しむことを勧めたい。

## 8.2 アジアと日本の近代化の苦闘

言うまでもないことだけれど、世界のどこでも歴史が積み重ねられた。それぞれの歴史は、今日そこで暮らしている人々にとって切実なものだ。しかし、一人の人間がそれら全部を見渡すことはできない。ましておじいさんは、ここからも、ほとんどを省略することしかできない。もし他国の歴史の一端にふれる機会があったら、想像力を働かせる心構えだけはもっていてほしい。

### A. 西アジアとインドの苦闘

#### オスマン帝国の近代化

オスマン帝国の北アフリカ支配はゆるみ、それぞれの地域はほとんど自立していた。1830年にアルジェリアがフランスに奪われた。エジプトでは、マムルーク出身の軍人が実権をにぎっていた。そこへナポレオン軍が来たので、オスマン帝国は援軍を送った。その後、派遣された軍隊の中から頭角を現わしたアルバニア人の男が、エジプトの支配権をにぎり、権力を世襲するようになった。

バルカン半島では、ヨーロッパとの交易が非イスラーム教徒の経済活動を活発にし、西ヨーロッパの革命の波が民族主義の運動を刺激する。1820年代に、ヨーロッパ諸国が応援してギリシアが独立した。この新しいギリシアは、長くビザンティン帝国の中にあり、オスマン帝国の支配を受けた国で、古代ギリシアとはずいぶん違う社会だ。ほかのバルカン諸国もしだいに自立していく。

オスマン帝国は、手をこまねいていたわけではない。進行をさまたげる勢力もできごともある中で、軍事・行政・法律・教育を西ヨーロッパ化する改革が徐々に進んだ。イスラーム帝国から世俗的な国家に変身していく。官僚機構をもつ集権的な政府と近代的な軍隊ができていった。留学生も派遣する改革は、各領域に近代的なエリートを生みだす。国民国家トルコが形成されつつある。けれども、ヨーロッパの経済的な侵入は、力強い前進を許さない。1875年には、まるで現代のことのようだけど、外国からの借金の利子が払えなくなった。憲法を決めるところまで行ったのに、民主化はとり消されてしまう。

## インドの不幸

インドでは、ガンジス川下流域を領域的に支配するようになっていたイギリスが、インドの分裂状態について、さらに領土を広げる。南インドの王国を破り、中部のマラータ同盟にも勝つ。1800年代初期までに広大な支配地になった。海外の富の獲得が助けて産業革命が進むと、イギリスは、インドを原料の生産地とし、自国製品の輸出先とするようになる。年月とともに、そういう経済の動きはいつそう進む。東インド会社の独占的な利益を、産業資本家や商人が奪いとっていく。土地からの収益だけでなく、産業的な収益もあげる植民地経営に発展して、インドの富がイギリスへ運ばれる。インドの社会は大きく変化していった。イギリス流の土地の支配と税の制度が社会のあり方を変える。農村で輸出用の綿花や紅茶そ

してアヘンを栽培することが広がり、世界システムに組みこまれた商品経済が人々の生活を変える。

1800年代中頃、北インドの王国を破り、イギリスの支配はインド全域に及ぶことになった。こういう展開の中、1857年、東インド会社のセポイと呼ばれていたインド人の雇い兵が反乱を起こした。反乱は、インド最初の民族運動となって、広い範囲に広がり2年間続く。反乱を平定したイギリスは、当然のなりゆきで支配を強化する道に進む。皇帝を退位させ、形だけになっていたムガル帝国を消滅させた。東インド会社も解散して、イギリス政府が、総督を派遣し直接統治するようになった。イギリスは、さらに近代的な基盤をつくる事業をおし進める。それは各方面で、インド人の中から近代的な人々を生み出すことになる。

## B. 中国の苦闘

### 近世の継続

ヨーロッパが飛躍して近代に入っても、中国の近世は続いた。1700年代の末、小作料や税を払わない農民一揆が起きようになっていたが、乾隆帝が退位したら、清のかかえていた問題があらわになった。1796年、かつて紅巾をかぶって登場した白蓮教徒がまた反乱を起こした。清朝の旗本である満州八旗に昔の軍事力はなく、漢人の軍が清朝の主力軍になっていたが、反乱を鎮圧できない。臨時に招集した義勇軍や、郷紳たちに組織させた自衛集

団に頼る状態であった。反乱は 1800 年代初めに平定されたが、支配体制の弱さを見せつけた。軍事費の出費は財政を圧迫し、増税が社会を不安定にする。

ところで、アメリカ大陸の農産物が、人々をそれまで耕作のむづかしかった土地へ進出させた。トウモロコシやサツマイモは、水利の便のわるいところでも生活を支えることができる。中国の人口は増大を続けた。人口の膨張は、漢人を内モンゴル・青海省・台湾・ミヤオ族の地域へ進出させ、先住の人々を圧迫する。漢人が海外へ出ることも始まっていた。華僑(かきょう)だ。

清王朝は管理貿易を採用している。中国人は長崎に来たけれど、海外に開かれた港は広州だけだ。それでも、ヨーロッパ文明を受け入れることは続いた。乾隆帝は、父の離宮である円明園をヨーロッパ風のバロック建築に改めている。当時の日本にそれほどの西洋建築を建てる財力はなかっただろう。だが、ヨーロッパに対抗できるほどの経済活動は生まれなかった。自立した「市民」が層として勢力をもつこともなかった。

## ヨーロッパの侵攻

ヨーロッパの経済が発展するにつれて、多くのヨーロッパ人が交易のために中国に来た。合州国からも来るようになった。中でも世界システムの中心であるイギリスは熱心だった。しかし、中国人のほしがる製品をまだそれほど生産していなかった。イギリスは、中国から茶・

絹・陶磁器をたくさん輸入したのに、それに見合う輸出品がない。なんということだろう、自国領のインドでアヘンを生産して、それを中国にもちこんだ。アヘンは麻薬である。清政府は1700年代末に禁止したが、イギリスは密貿易によってアヘンを大量にもちこみ続ける。

イギリスは、ナポレオン戦争が終わると、また領土の獲得に乗り出した。1819年、シンガポールを占領した。1824年に、ミャンマーを侵略し始める。そして、オランダと、マラッカ海峡を境界とする縄張りを決めた。のちに、ボルネオ島での縄張りも決めている。イギリスが今日のマレーシア側を、オランダがインドネシア側を取った。アヘンを積んだイギリスの密貿易船が、インドから出てシンガポール経由で南シナ海を北上する。

1839年、特命大臣の林則徐が広州に着任し、外国商人にアヘンの提出を命じた。集まったアヘンは1400トンもあったそうだ。とほうもない量だ。イギリスの駐在官は今後アヘンをもちこまないという誓約書の提出を拒否し、清軍とイギリス船が大砲を打ちあった。すると、近代民主制のイギリス議会が、不名誉な戦争の予算を可決する。1840年、軍艦20隻と4000名のイギリス軍が中国に来了。これだけの数でも、沿岸部を防衛できる軍隊は東アジアにはなかった。1842年清帝国は、長江を攻め上って南京に迫るイギリスに屈服した。南京で条約をむすぶ。香港を奪われ、賠償金を払わされ、広州・上海など5港を開港することになった。五つの港はイギリス軍が戦闘しながら視察したところだ。翌年の通商についての条約で、

イギリス人に対する裁判権を失い、関税を自主的に決められなくなった。すぐに、アメリカ合州国とフランスに、イギリスと同等の権益を提供させられた。

1856 年、アロー号という船のイギリス国旗が引き下ろされたことを口実に、イギリスがまた戦争をしかけてきた。今回は、ナポレオン 3 世のフランス軍までいっしょだ。第 2 次アヘン戦争と呼ばれることが多い。ロシアは参戦しないが同じ仲間だ。広州を占領され、天津に來られて屈服した。この時期に、ロシアとのアイグン条約で黒竜江の北側を取られている。イギリス・フランスとは行き違いが生じて、1860 年、あらためて 2 万の英・仏軍が北京に進軍して来る。北京郊外の円明園離宮を破壊されて、威力を目の当たりにすれば、条約をむすばざるをえない。北京条約という。また多額の賠償金を払われ、北京への入口である天津を開港することになった。香港島の対岸もイギリスに取られた。清帝国がヨーロッパ列強に対抗できないことが明らかになった。これ以後、列強の海外社員が、大人口をかかえる中国を市場として、自国の発展した産業のつくりだす製品を売りつけてくる。中国の富が、経済活動によって海外に流れる。

ここでわき見をすれば、フランスは、1858 年からヴェトナムに、1863 年からカンボジアに侵略を始めた。後年、フランス領インドシナとし、タイからラオスの支配権も奪う。東南アジアでタイだけがかろうじて独立を保つ。



## 清の苦闘

外患には内憂がともなう。1840年代に、広州の近くで宗教集団が生まれていた。プロテスタントのパンフレットに触発されたというが、その神は中国流の天帝に近い。1850年頃から戦闘集団になり、太平天国と称するようになる。上海などが開港されて経済状況は急変し、社会は動揺していた。反乱軍は民衆の支持を受け、1853年に南京を占領したときには数十万の大群衆であった。しかし、天国内の諸王の勢力争いから力を失っていく。清朝側では二つの省の在地勢力が軍を組織して、反乱軍を追いつめるようになった。淮河(わいが)一帯で軍を組織した人物を李鴻章という。1860年からはイギリス・フランス軍も加わって、1864年太平天国はなくなった。

清帝国は重い病気だけど、清朝の統治は続く。1861年皇帝が死んで、あとを継いだのはまだ子供だった。その母親が実権をにぎる。ほとんど皇帝だった。西太后という。清の政府は、列強に対応しなければならない官僚層が中心となって、西洋の新しい技術を導入する政策をとった。清帝国のゆるんだ体制と苦しい状況の中で、改革はかなり実施されたと言える。巨象の苦闘が続く。

### C. 1800年代の朝鮮

朝鮮半島は中華帝国と国境を接し、いつもその圧力に向かいあわなければならなかった。李氏朝鮮の政治体制は中国流の中央集権的な郡県制で、両班と呼ばれる最上

位身分が土地を所有する地主制を基礎としていた。日本の封建制とは違う。建国から 400 年以上たった 1800 年代、農業の生産高が増えて農村は変化し、貨幣経済も進んで商業が活発になり、手工業が発展した。それでも、社会と経済は兩班地主制を基礎としている。乱れた政治が人民を圧迫し、1810 年代には大きな農民反乱が起きた。

宮廷の政治はまだ古い姿を見せる。1800 年代初期から、王妃の一族が政権をにぎることが 60 年近く続く。日本の藤原氏のように、次の王妃も一族から出すというやり方をとった。1862 年にまた大きな反乱が起きている。1863 年に政権が交代すると、政治の乱れを正し、兩班に税を課すなど税制を改革した。近代への模索が始まった。

すでに 1840 年代、イギリスやフランスの軍艦が現われた。政府は海禁政策を強化する。宣教師を殺されたフランスが、1866 年、7 隻の軍艦を派遣して江華島を占領し、首都へ進軍した。ところがフランス軍の兵力は多くなく、朝鮮軍が陸戦で勝利する。以前に中国経由で伝わったカトリックの信徒がいたが、この頃、数千人の死者を出す弾圧政策をとっている。1871 年にはアメリカも軍艦 5 隻で来たが、結局引きあげた。西洋人を入れない政策はなんとか成功したと見えたかもしれない。

## D. 日本の近代化への苦闘

### 近世の継続

1780年代の天明年間、冷害で2年つづく大飢饉が2度起きた。大量の餓死者が出た。この頃から100年以上地球は寒冷期で、1820年代に隅田川に氷が張ったことがあったそうだ。享保・天明・のちの天保の大飢饉では人口が減っている。農村に貨幣経済が大きな影響を与えるようになった。農地を手放す農民が出て、土地を集める地主が増えていく。都市に逃げ出す者もいる。封建体制の基礎である農村社会が動揺している。百姓一揆が増えた。それも、村々の百姓総出の一揆で、激しい場合には打ちこわしをした。地主層と小作農民との利害の対立が騒動になることもあった。百姓一揆は中国のような反乱ではないけれども、江戸時代終末期になると、村や町の民衆が世直しを求める一揆が現われる。

幕府の側には財政難があった。1790年前後、徳川吉宗の孫で親藩の養子になった松平定信が、政治や経済の体制を立て直そうとした。寛政の改革という。農村対策や商業・金融政策を実施した。江戸の民衆に対する施策も実施し、思想や文化まで統制した。しかし、反対派が出て5年もすると失脚する。日本近海で外国船を見かけるようになり、1792年には、ロシアが通商を求めて北海道に来た。幕府は国防の問題を意識するようになる。

朝廷は年号を公布するものの、唐代の暦を800年間使

っていた。1600年代後半、渋川春海という人が出て日本で初めて暦をつくった。前に話の出た元の暦や、西洋天文学の漢訳書も参考にして、みずから星を観測してつくったのだ。天文方という観測所が置かれ、幕府が中央政府として暦を管理することになった。さて、1700年代末、千葉県に裕福な酒・醤油の製造業者がいた。52歳で隠居すると、幕府の天文方に出入りして勉強を始める。ちょうど北海道防衛の課題が浮上した。56歳の伊能忠敬は、自分の弟子を連れて測量に出かける。ある地点の南北線を磁石で決め、次の地点の方角と距離を測定する。それを海岸線に沿ってくりかえせばよい。言うはやすく行ないがたいというのはこういう仕事をいうのだ。彼はそれを実行した。日本全体の測量を続け、やがて幕府の公的な事業になる。およそ40000kmを3737日歩きとおした。終わったときは72歳。なんという情熱だろう。こうして、あの伊能図ができたのだ。その精度は当時のヨーロッパのものに負けない。伊能忠敬のあと、間宮林蔵がカラフト(今のサハリン)を探検し地図をつくった。そこにもアイヌの人々が暮らしていたけれど、ヨーロッパの流儀で言えば、日本の領土にする権利ができたのだ。

ところが、寛政の改革のあと、11代将軍が主導する政治でゆるみが生じた。年号から文化・文政時代と呼ばれている。大都市で大衆文化が栄えた。でも、百姓一揆はこの頃から増加する。ロシアの使節が長崎に来て国交を要求し、イギリスの船もオランダ船を追って長崎に現われている。1825年、幕府は異国船打ち払い令を出した。

## 江戸時代後期の文化

この時代の儒学者は、独創的な思想を提出したとまでは考えられていない。当代の第一人者として佐藤一斎の名だけをあげよう。幕府の学問所の長になった人で、幕末の知識人、佐久間象山・渡辺崋山・横井小楠はその弟子だ。語録集『言志四録』は志士たちの徳をやしなった。中国生まれの儒学やインド生まれの仏教哲学を好まない江戸時代の学者は、日本古来の考え方に光を見つけようとして、国学になった。本居宣長たちの名が教科書に載るけれど、考え方は内向き過ぎて、地球のどこへ行っても意味をもつ重要な思想とは言いにくい。オランダ語を学んだ人たちが、ヨーロッパの知識を日本に広めるのに尽くした。杉田玄白は、前野良沢たちと解剖書を翻訳して出版した。日本で西洋の書物を翻訳した最初の仕事である。杉田は、回顧録『蘭学事始め』を書いている。学問への情熱を知ることができる。この時代の雰囲気伝えるために、大分県の日田に広瀬淡窓という教育者が出たことも言っておこう。幕末までひき継がれた塾には全国から塾生が集まり、女性もいたということだ。高野長英や大村益次郎も若いときここで学んだ。

文学では、時代の行きづまりを反映したような作品が生まれた。版木で刷って流行にのるたくさん読みの物が出た。後期を代表する作家に上田秋成や滝沢馬琴がいる。上田秋成は、本居宣長の皇国思想を批判し論争している。江戸の知識人はやはり漢詩をつくっている。和歌も多くの人のたしなみだった。その中で、孤立した禅僧の良寛

は、新しくはないかもしれないけれど味わいのある和歌を詠んだ。与謝蕪村の俳句を聞いたことがあるだろう。

芸術のことまで話す力はないから省略しよう。

## 時代転回の序幕

1830 年代天保年間に入ると、また大飢饉が発生して、餓死者が出た。物価が上がり、いくつかの国では数万人もの百姓が参加する一揆になった。1837 年大阪で反乱が起きた。町奉行所の与力を引退し陽明学者として塾を開いていた大塩平八郎という人が、世の中の改革を訴えて立ち上がったのだ。武士 20 名と 300 人あまりの人々の小さな反乱だが、幕藩体制の問題を世に知らせる事件だった。中国でのアヘン戦争のニュースが届いた。

1841 年、老中水野忠邦が天保の改革を始める。軍制の改革や砲術訓練が始まった。海岸線の警備体制も整えられる。異国船打ち払い令はとりやめ、外国船に水やまきを提供することを許可した。内政ではさまざまな政策がうち出されたが、物価の上昇は武士たちにも影響し、幕府の収入を増やす施策も農民の抵抗と大名・旗本の反対に会う。1843 年、水野忠邦は失脚してしまう。

これに対して、西日本のいくつかの大藩で、財政をなんとか立て直したところがあった。萩藩では、商品経済からの収入をはかり、藩士と藩の負債を帳消しやローンにし、特別会計に組み替えた。鹿児島藩でも似たようなやり方で財政を再建した。そこでは、250 年分割払い(!)

を強行した。佐賀藩も改革をおこなった。これらの藩では、西洋式の大砲を製造し、製鉄設備をつくる。もう一つ重要なことは、昔なら考えられなかったことだけど、中級・下級の武士たちが藩政を主導したことである。萩藩の村田清風は中級武士だったし、鹿児島藩の調所広郷は茶坊主上がりだった。時代は変化している。

### 危機に立ち向かう幕府

幕藩体制は内政で行きづまっていたのだけれど、破壊的な力は海外から加わった。1853年、ペリー提督ひきいるアメリカ合州国の軍艦4隻が東京湾に現われた。幕府は、開国を要求する大統領の親書を受けとったが、交渉を先のばしにするために、1年後の返答を約束して帰ってもらった。大名や旗本からも広く意見を集めたが、妙案はない。とにかく江戸にお台場を築き大砲をすえた。翌年、1年しないうちにペリーがまた浦賀(横須賀)に来了。合計9隻で、外輪駆動の蒸気船が3隻である。こんどもおおぜいの人々が見物に出る。幕府は、アヘン戦争のことも知っていて、応戦もできないから、日米和親条約がむすばれた。とうとう日本は開国することになった。

萩藩の吉田松陰が合州国へ渡ろうとしたのは、黒船が条約の細部をつめるために下田に停泊中のことである。密航に失敗すると自首した。彼と師である佐久間象山は幕府に捕らえられる。老中首座の反対で死罪を免れたけれど、吉田は萩の牢に閉じこめられることになった。

政治の急展開する幕末・維新の15年間が来る。その時

代を知りたかったら、大仏次郎の史伝『天皇の世紀』を読んでくれたまえ。見事な文章で、さまざまできごとに人間たちがどのように行動したかが語られる。

和親条約がむすばれると、合州国から総領事が下田に来て、通商条約の交渉が始まった。政府は、通商条約を締結することは避けられないと判断する。幕府は、ずっと外交権を行使してきたのだし、海外情勢を最もよく知っていた。だから、そうする必要はなかったのだけれど、条約の合意ができると、老中堀田正睦は、世論をしずめる目的で、天皇の同意をとりつけるために京都に出かけた。ところが、開国・通商は長い「鎖国」が生みだした感情を逆なでするものだった。異民族を討てという攘夷(じょうい)の声があがる。京都の朝廷はその中心だった。江戸幕府は苦境におちいった。形式的な権威者にすぎなかった天皇が、急に大きな政治力をもつ者として出現し、京都がもう一つの政治の舞台になる。

老中たちは、親藩の水戸藩徳川斉昭や福井藩松平慶永らの意見を聞きながら政治をおこなってきた。その親藩の藩主と譜代の重臣である彦根藩伊井直弼とは対立していた。次期將軍の指名争いをてこに、政権をとったのは伊井直弼である。大老になると、行きづまった条約問題をいっきに解決するために、1858年、朝廷の同意なしに日米修好通商条約に調印した。さらに、対立する勢力を安政の大獄と呼ばれる弾圧で押しのけた。数十人を逮捕し、数人を死刑にした。水戸藩では家老が切腹させられ



刑死者も出た。徳川斉昭や、その子で一橋家の養子になり将軍候補者だった一橋慶喜は、謹慎処分になった。

吉田松陰が処刑されたのはこの時だ。彼は、牢から仮釈放されると松下村塾を開いていたけれど、過激な言動をしてまた捕らえられ、江戸に送られたのだ。高杉晋作・久坂玄瑞・伊藤博文・山県有朋などが塾生だったことはよく知られている。年少の友人木戸孝允が、伊藤博文たちと、荷車を引いて刑場に遺体をひき取りに行っている。松陰の授業は一方的な講義でなく、質問して考えさせるやり方だった。問いかけは心に響いたのだろうか、門下生たちは激動の時代を駆けていく。

日米通商条約がむすばれると、ヨーロッパの列強も同じような通商条約を要求した。長崎・神戸・横浜・函館・新潟の5港を開き、江戸・大阪での取引を認めた。しかし、外国人の裁判権がその国の領事にあり、関税を自主的に決められないなどの不平等な内容だった。海外貿易が日本の経済に影響を及ぼすようになる。生糸などの輸出の急増は、価格から経済状況まで変える。遠くの農村にも影響が現われたはずだ。つまり、日本が、資本主義経済の世界システムに組み込まれることになったのだ。さびしい漁村だった横浜市などの発展がそれを証言している。大阪の緒方洪庵の塾でオランダ語を勉強した福沢諭吉は、開港した横浜に行って英語の必要性を知った。

1860年、条約の批准書を交換するために、幕府は合州国に使節を派遣する。使節たちは合州国の軍艦に乗った

が、別に幕府所有の軍艦咸臨丸(かんりんまる)が太平洋を横断した。木造だがスクリューで進む蒸気船である。軍艦操練所教授勝海舟や福沢諭吉はこの船で合州国へ行った。日本人の乗組員だけで船をあやつれるか心配して、合州国の軍人が乗りこんだ。使節一行は、滞在した首都ワシントンで驚きの体験をしたことだろう。

## 事態の流動

咸臨丸で一足先に帰国した勝や福沢を迎えたのは、水戸藩を脱藩した者たちが伊井大老を斬ったというニュースだった。多事多難の1860年代になる。朝廷の力が増して、幕府の統制力が弱まると、諸藩からさまざまな意見が出された。幕府は朝廷と妥協をめざし、14代将軍と皇女が結婚する。公武合体という提案に沿うものである。だが、尊王攘夷派の者たちが、攘夷の決行をせまり騒動を起こし続ける。そこで、1863年、天皇や京都守護職の会津藩などに、鹿児島藩が加わって、尊王攘夷派を朝廷から追放した。この政変で萩藩は閉め出され、三条実実ら七人の公家が都落ちした。

イギリス人が鹿児島藩の行列に斬られた事件があったが、1863年、イギリスの艦隊が賠償を求めて鹿児島湾に来て戦争になった。萩藩は関門海峡を通過する外国商船に砲弾を打ちこんだ。1864年、前の年の政変で孤立した萩藩は、討幕派の意見が高まり、兵を京都に送る。御所を守る会津藩・鹿児島藩などと交戦して敗北した。禁門の変という。戦国時代以来の戦火が京都の町を焼いた。

同じ月、英・仏・米・蘭(オランダ)の四国連合艦隊 17 隻が、前年の砲撃に報復するために下関に来て戦争になった。砲台を占領されて、高杉晋作が代表で交渉している。鹿児島藩も萩藩も、攘夷の不可能なことを、身をもって知った。イギリスとの接触をはかり、留学生を送る。また武器を輸入して西洋式の武力を増強するようになる。すでに幕府は、陸軍と海軍の西洋化を進めていた。

禁門を攻めた萩藩に対し、朝廷は追討の命令を出した。幕府が西国 21 藩に出兵を命じる。欧米列強 5 か国が通商条約の改定を要求して、状況は緊迫していた。幕府代表の一橋慶喜が京都で有能に行動している。萩藩追討軍の参謀は、鹿児島藩の西郷隆盛である。彼は、幕府の力が増大するのを恐れ、萩藩をつぶすことを願ってはいない。萩藩では保守派が政権を取り、三家老など七人の首をさし出した。追討軍の派兵は中止される。

## 回天または舞台の転回

これよりも前、萩藩の高杉晋作は、下関戦争の準備段階で、武士か庶民かを問わない奇兵隊の結成を提案し、人数は多くないが諸隊ができていた。萩藩追討の命令が出て保守派が藩の政権をにぎると、彼は亡命していた。討幕派は最悪の状態にあった。そのとき、直観力にすぐれた高杉晋作は、旧暦でその年の暮れ(新暦 1865 年)、舞台を回すために下関にもどって挙兵する。集まったのは伊藤博文の隊など 90 人足らず。山県有朋たちは参加しない。この「狂挙」に藩の政権はすばやく対応しなかった。高

杉の仲間は藩の軍艦を奪う。やがて参加者が増えると内戦になった。反乱軍は萩から出た軍を破って勝利する。討幕派が政権を奪い、藩政府は山口に移る。幕府のお尋ね者になって姿を隠していた木戸孝允が帰ってきた。

鹿児島藩の西郷隆盛や大久保利通たちは、今は亡き開明的な君主の弟子である。藩主が交代すると苦境に立たされ、西郷は入水自殺して救われている。彼らは、政治を動かす権力の怖さをよく知っていたから、幕府につかず離れずの立場に立ってきた。萩藩とは長く対立していたが、今や舞台が転回した。高知藩の坂本龍馬が説得して、西郷と木戸が会って同盟がむすばれた。

幕府は萩藩(長門・周防)に対し第2次征討軍を組織する。だが、鹿児島藩や多くの藩が軍事作戦に参加しなかった。1866年戦争が始まる。幕府軍は広島側から攻めてよく戦ったが前進できない。浜田藩は大村益次郎の指揮する部隊に抗戦できず、石見銀山まで占領された。関門海峡の対岸小倉藩の北部も高杉たちの活躍で占領された。戦争は社会と経済を混乱させている。大阪城にいた14代将軍が死ぬと休戦になった。高杉晋作が燃え尽きて死んだ。

幕府の支配力が弱くなった中で、徳川慶喜が15代将軍を継いだ。彼は、京都にあって、困難な政治状況を打開するために行動を続ける。幕府は近代化のための改革を実行した。横須賀に製鉄所や造船所がつくられている。幕府軍のいっそうの近代化もおこなわれた。フランスが軍事顧問団を派遣して幕府軍に肩入れした。

諸勢力の意見が違いなかなか政治は進まない。事態を動かすために、高知藩の後藤正二郎が大政奉還の案を出した。将軍が政権を返還し、議事堂で政治的な決定をしようという坂本龍馬の意見だ。1867年旧暦の10月、徳川慶喜は、討幕派の動きをおさえるために、その体制でも主導権をにぎるつもりで大政を奉還した。朝廷は、新体制を決めるために有力諸侯の会議を招集する。朝廷でも主流派は親徳川で、諸侯も急激な変化を望んでいない。

こんど舞台を回したのは大久保や西郷だった。12月、少数派の討幕派は突破策を立てる。萩藩はまだ京都に来ることを許されていない。鹿児島藩を中心に高知藩・福井藩・名古屋藩・広島藩が参加した。諸侯会議が終わると、5藩の兵が御所の門を閉じ、王政復古のクー・デターが決行された。朝廷と幕府の旧体制を廃止し、親王の総裁の下に10人の議定(ぎじょう)が任命された。議定のうちの5人は5藩の藩主または前藩主たちだ。その下の参与に、岩倉具視など5人の公家と5藩の藩士が加わる。その日の夕方、この年即位したばかりの若い天皇が出席し、新体制の会議が開かれた。高知藩山内豊信たちが、徳川慶喜の処遇をめぐる、岩倉・大久保と激しく論争した。外には西郷のひきいる兵がいる。休憩中に決死の行動をほのめかした岩倉の覚悟が反対派に伝わり、論争が終わった。王政復古を発表し、西洋列強の公使たちにも通達する。太陽暦1868年1月のことである。

徳川慶喜には、将軍職と領地の大半を返上するよう命

令が出された。彼は二条城を出て大阪城に移る。戦略上の失敗だったのかもしれない。鹿児島藩が江戸で騒動を起こし、幕府側が鹿児島藩邸を攻め落とす事件が起きた。つられて大阪城の幕府軍が京都に攻め上る。鳥羽と伏見で戦闘になった。天下分け目の戦争だ。新政府軍は 5000、幕府軍は 15000。だが、作戦を練っていない幕府軍は、敵の正面を攻撃し敗れた。ついに大阪城にいた徳川慶喜の気力が消え失せた。最後の将軍は、軍艦に乗って江戸に退散し、また謹慎する。

大勢が決した。五箇条の御誓文が発表され、新政府による政治の開始が告げられた。東征軍が派遣される。有名な西郷隆盛と勝海舟の会談で、江戸が戦火で燃えることは避けられたが、旗本たちが上野で戦っている。西日本の諸藩が変わり身も早く新政府側についたのに、陸奥・出羽・越後の諸藩が、疑問を感じて律儀に東征軍に対立したが、最後まで徹底抗戦した会津城が落ちた。

1868 年、江戸は東京という名に改められ、太陽暦 10 月、一世一元の年号が明治と発表された。人が明治維新と呼ぶ新しい体制のはじまりである。維新という言葉は中国の古い書物に出る漢語で、「これ新たなり」と読む。近代に向けた体制の転換は、多くの人々の働きでできた。肯定できないこともたくさんあったけれど、名を出せなかった人たちも含めて、人々がそれぞれの持ち場で懸命に行動し、責任を果たした。